長崎におけるボートレースに関する研究

古　城　庸　夫*

要　約

ボート競技の起源については，長く口伝として長崎でオランダ人がボートを漕いでいた。また慶応2年にバージクラブというローイングクラブがボートを漕いでいたが，正確な記録は残されていないと伝えられ，慶応2年には横浜でボートレースが行われたといわれている。

したがって，日本におけるボート競技の起源はこの口伝によって慶応2年とされてきたが，既存記録の検証と新しい資料の発見により日本におけるボート競技の起源について新しい発見があったといえるだろう。

キーワード：ボートレース，レガッタ，端艇，競漕

1. はじめに

明治期から今日まで，ボート競技の書物が数多く刊行されている。しかしそれらの多くは技術的な内容が主で，ボート競技の起源をイギリスに求めている場合が多い。したがって日本におけるボート競技の起源に言及している場合は非常に少ないが，昭和11年（1936年）に東京帝国大学ボート部[1]出身で東京日日新聞（現毎日新聞社）の久保勘三郎によって東京帝国大学漕艇部五十年史が刊行されたことで，日本の学生による隅田川で行われ始めたボート競技の始まりが詳細に明らかにされた。

しかし東京帝国大学漕艇部五十年史では，学生が始めたボート競技の起源以外には触れられていない。はじめて学生以外の日本におけるボート競技の起源に触れたのは，昭和12年（1937年）に大日本体育協会から刊行された大日本体育協会史下巻の日本漕艇協会史（宮木昌常，編集担当委員・日本漕艇協会役員・早稲田大学ボート部出身）であろうと思われる。

日本漕艇協会史によれば，

「之をスポーツとして，体育として用いた記録に至っては，或いは長崎に居住した和蘭陀人（オランダ）又は和蘭人と称した外国人がやって居たかは知れぬが，確然としたものはない。今日最も確かなのは維新直前横浜開港間もない慶応二年に，横浜山下町十二の海岸通りにバアージ[2]と称するローイング倶楽部が出来，スライディング・シートのボートなどを備え付けた在留外人連盛んに漕ぎまわっていたのが，初めだと云ってよい。之が今の横浜アマチュア・ローイング倶楽部の前身である」[3]

と書かれている。

これら東京帝国大学漕艇部50年史と大日本体育協会史を参考にして，慶応大学ボート部出身で時事新報社の宮田勝善（日本漕艇協会役員）が久保勘三郎と協力して昭和32年（1957年）に発行したのがボート五十年であろうと思われる。

したがってボート五十年によれば，

「このボートをわが国で，スポーツとして最初に利用したのは，長崎在留のオランダ人と言わ

2012年11月24日受付
* 江戸川大学　経営社会学科准教授　近代スポーツ史

れている。しかしこれも口伝(くちづて)で，正確なことはわからない。今日，記録として残っているのは，横浜開港間もない慶応二年，横浜市山下町十二番地の海岸通りに，バージというボートクラブがあって，英本国から取り寄せた数隻の滑席艇[4]をもっていたのが，最初といわれている」[5]

と書かれているが，文中にも口伝(くちづて)とあるようにボート競技の起源は明確には明らかにされていない。

そこで本研究では，新たに発見された資料から日本のボート競技の起源について明らかにすることを目的とする。

2. 既存記録の検証と資料の発見

昭和11年（1936年）の東京帝国大学漕艇部五十年史と，昭和12年（1937年）の大日本体育協会史下巻の日本漕艇協会史の発行以降，第2次世界大戦などの影響を強く受け記念史等の発行は行われず，戦後の混乱期を乗り越えて昭和32年（1957年）に発行されたのが，ボート五十年だったのではないかと思われる。

さらに昭和34年（1959年）日本体育協会から発行されたスポーツ八十年史のボートの歴史によれば，草分け時代として

「日本でボートを漕いだのは，なんといっても海軍と在留外人が初めてのようである。横浜のアマチュア・ローイング・クラブなどはずいぶん古い時代からあって，その組織もかなり完備していたようである」[6]

と述べて口伝の域を出ていない可能性を示している。また巻末の日本スポーツ年表は明治4年（1871年）以降の項目で体操と水泳の事項を採用し，ボート競技としては明治15年（1882年）体操伝習所が石川島造船所に命じボートを新造と書かれている[7]。

また昭和38年（1963年）に発行された日本体育協会五十年史の日本漕艇協会の項目では，

「日本の漕艇の歴史は明治十年頃東京大学の前身である大学南校が，外国捕鯨船の搭載ボートを数隻購入したことに始まる。それまでにも居留外人の間では行われており，長崎在留のオランダ人が最初にボートを漕いだといわれているが，確かな記録として残るものは慶応2年に開港間もない横浜の山下町海岸でボートレースが行われたことである」[8]

と書かれているが，それらは巻末の日本スポーツ年表にも採用されていない。

また昭和41年（1966年）に宮田勝善によって書かれ，時事通信社から発行されたボート百年の日本のボートの起こりによると，

「日本で最初にボートを漕いだのは長崎在留のオランダ人だという。ヨットや，四人漕ぎ滑席艇を母国から取り寄せたというが，正確な記録は残っていない。
記録的に最も古いのは，慶応二年（1866年）横浜市中区山下町12番の海岸通りに，イギリス人が中心となり，本国から持ってきた数隻の滑席艇で，バージ・クラブを創ったことで，これは横浜アマチュア・ローイング・クラブ（Y. A. R. C）の前身である」[9]

と，これまでに発行された本と同じように明確にされていないのである。

したがって，ボート百年が書かれた昭和41年（1966年）以降に書かれた，日本の体育史やスポーツの歴史について書かれた本の中にはボート百年からの引用と思われる記述が目立つようになっていったと思われる。

すなわち昭和45年（1970年），今村嘉雄によって書かれた日本体育史の欧米スポーツの伝来という項目では，

「漕艇は幕末に幕府が築地に講武所を作り，同所で軍艦操練をはじめるようになると，バッテラ[10]漕ぎの練習も行われるようになり，横浜の外人たちは慶応二年（1866年）本国からボー

トを取りよせてレースを行っているし，明治になっては，官立学校で盛行するようになる」[11]

と慶応二年を日本で行われたボートレースの起源ではないかと述べている。

また昭和 50 年（1975 年），遊津孟によって書かれた日本スポーツ創世記の明治 20 年頃までのスポーツという項目には，

「ボートは外人や外国水兵などによって維新前後からおこなわれ，海軍兵学寮で行われていた」[12]

と書かれている。

そして昭和 51 年（1976 年）に宮田勝善により改定新版として発行された，ボート百年の記述もボート 50 年と同じような記述で新たな事柄は述べられていない。

このように日本のボート競技の始りについて書かれた多くの著作について再考すると，ボート競技そのものの捉え方に矛盾があるのではないかと思われる。

それは今日のボート競技に対する認識が，競技用に特別に作られた艇とオール（櫂）を用いて 2000 m のタイムを競いオリンピック大会などでも行われるボートと，公園及び海浜あるいはお濠などの水空間に見られるような娯楽的ボートの違いを踏まえて考えられていないからではないだろうか。

水に浮き人が漕いで進むボートの起源はよく知られていないが，比較的小さなボートは港の深度が整備されていない時代に大型の船は岸壁に着岸出来なかったと思われることから，沖に停泊する大型艦船と陸地を結んで人員と荷物等を運搬するために人が漕ぐボートというものが利用されるようになったのではないかと思われる。それはかつてのイタリアのベニスに見られるゴンドラや，イギリスのテームズ川河口に見られるような小型のボートの活躍した一つの時代を示す極めて便利な道具であったと考えられる。

そして人や荷物を運ぶために作られていったと思われるボートが，それを操る人の自然な営みの中で近代化により高い効率を求められるようになった結果，他のボートを漕いでいた職業人と時間と金銭を競うことの快感を知るようになって生じたのがボート競技のレースではないだろうか。

やがてボートレースに見られるボート競技がテームズ川に誕生したが，勝敗に金品を授与するようになった結果，他競技に先駆けてプロ選手の誕生を見たといわれている。

しかしテームズ川における大学生の剣牛レース[13]（オックスフォード大学とケンブリッジ大学のエイトによる対校戦）が，市民の人気と賭けの対象になるようになると，さらに注目を集めるようになり，母校の勝利を求めるあまり OB やプロのボート選手をボートレースに出場させるような事態が出現した。

結局そのことが世界で初めてボートレースというスポーツにおいてプロ選手の出場を認めないというアマチュア規定の出現を見ることになるが，こうして他競技と同じように多くの偶然から人と物を運ぶために生まれたボート（小型の舟）が，時間を競う競技へと昇格していったのではないかと思われる。

つまり一般的に呼ばれているボートとは，人と物をオールという道具を使って運ぶ小型の舟であるボートと，決められた距離を開発された艇とオールで進みタイムを競う競技であるボートへと分化していったのではないかと考えられる。

それは幕末の日本を訪れた艦艇が使用していたボートと，外国人居留地に住むイギリス人などを仲介として，すでにイギリスで誕生し諸外国でも行われるようになっていた競技用のボートを本国から取り寄せて，漕ぐようになった競技用のボートが幕末の前後に存在していたのではないかと思われる。

このことは当時の日本に，それらを表す的確な訳語が誕生していなかったであろうことも合わせて，レガッタという言葉と同じようにヨットや櫓を漕ぐ和船などの他種目の水上競技が距離などの条件を変えて同じ大会で速さを競い合うという試合内容を出現していったと思われるのである。

したがってこれらの認識の違いによる影響は，平成7年（1995年）に日本漕艇協会（現日本ボート協会）から発行された漕艇75年に書かれたわが国最初のボートという項目にも見られる。

「日本で最初にボートを漕いだのは長崎在留のオランダ人だと伝えられるが，正確な記録は残っていない。確かな記録に残るものは，慶応二年（1866年）横浜・山下町の海岸でイギリス人が中心となって，本国から持ってきた数隻の滑席艇で，バージ・クラブを創立したのが最初とされ，さらに最初のボートレースとして記録されているのは，明治2年（1869年）4月英国ビクトリア女王の誕生日を祝う記念レースである。この競漕は横浜に停泊中の英国軍艦の水兵たちの間で争われたという」[14]

つまりこの記述によれば，日本でボートを最初に漕いだのは長崎在住のオランダ人だと伝えられている。競技用の滑席艇を漕いだ記録の起源は，慶応2年（1869年）であろうと思われる。また最初のボートレースとして記録に残されているのは，明治2年（1869年）4月であるとされているが，水兵によるレースに使用された艇の種類が書かれていない以上，厳密には競技用のボートを用いた最初のボートレースとは考えにくいと思われる。

おそらくこの明治2年（1869年）を最初のボートレースとするという，記述の根拠になっているのは，ボート五十年に書かれている以下のような記述によるものと思われる。

「おそらくバージ倶楽部の選手も，滑席艇で参加したことであろう」[15]。

しかし，バージ倶楽部の選手がボートレースに参加したとの記録は，見つかっていないことからボート競技における最初のボートレースとは一概に言えないのではないかと思われる。

おそらくそのような誤解は，明治初期の日本人によるボートが，バッテーラやギグ[16]あるいはカッター[17]と呼ばれたいろいろの形をしたボートを混在して使用していたからではないかと考えられるのである。

近代体育スポーツ年表によれば，

「明治2年5月24日イギリス女王ビクトリアの誕生日を祝し，イギリス兵，横浜で小舟の競漕会を挙行」[18]

とあるが，この記事の典拠文献は，昭和19年（1944年）石井研堂の改訂増補明治事物起源であるということが判明したが，近代体育スポーツ年表の典拠文献リストには他のボート競技関連の文献は見出すことが出来なかった。

また，当時日本には多くの外国人居留地の存在していたことがわかっているが，築地外国人居留地（川崎晴朗著）にはボート競技関連の記述を見出すことが出来なかった。

そのため他の外国人居留地について書かれた文献を求めたが昭和63年（1988年）初版発行の長崎外国人居留地の研究（菱谷武平著）の中にもボート関連の記事を見出すことは出来なかった。

そこで他の居留地関連の文献を調べたところ，昭和51年（1976年）に初版発行された居留外国人による・神戸スポーツ草創史（棚田真輔著）のなかに

「明治3年（1870年）香港から神戸に来て医療会館を築き，リーウェリン商事会社に加入したA・C・シム（Alexander Cameron Sim）が，スポーツ活動と社会活動を含めたようなクラブが必要であると考え，イギリス人の同僚とアメリカやドイツ人などの協力を得て，同年9月23日にKobe Regatta & Athletic Club（KRAC）を創設した。またKRACは同年12月24日にボートハウスと体育館の落成式を挙行し，第1回のレガッタ競技を開催して，神戸での外国人によるスポーツ活動を華々しくスタートさせた」[19]

との記述を発見したが，明治3年（1870年）に行われたレガッタで，ボート競技の種目が行われ

絵はがき１　古城蔵　イギリス　テームズ川
ヘンリー・ローヤル・レガッタ　明治 38 年（1905 年）
ボートコース両側に観客多数　競技用エイト（8 人漕ぎ＋コックスの 9 人乗）

たことを特定することは出来なかった。

しかし文中には

「明治 4 年（1871 年）には横浜に遠征し，横浜にあった横浜レガッタ競技クラブ，ニッポンレガッタ競技クラブと対抗し，神戸は 4 試合に負けたが，ハンデーなしの競技では，ニッポン競技クラブには軽く勝った」[20]

と書かれており，明治 4 年（1871 年）には横浜で神戸・横浜インターポート・レガッタ競技会が開催されたことが判明した[21]。

このことが昭和 52 年（1977 年）に初版発行された居留外国人による・横浜スポーツ草創史（山本邦夫・棚田真輔共著）と平成 16 年（2004 年）1 月発行の神戸外国人居留地研究会年報・居留地の窓から第 4 号の発見につながり，横浜や神戸，長崎における外国人居留地でのスポーツ活動の中でもボート競技の起源について，より詳細な事柄を明らかにすることが可能になったのである。

3. 横浜外国人居留地における レガッタの起源[22]

幕府が長く取っていた鎖国政策の間は，長崎の出島を通して諸外国の情報を得ていた日本は，次第にイギリス・アメリカ・フランス・ロシア・オランダなどの欧米列強による開国要求に直面するようになっていったと思われる。

開国の決断を下したのは，2 度にわたるマシュー・カルブレイス・ペリー（Matthew Calbraith Perry）の来航であったが，開国後は安政 6 年（1859 年）神奈川（横浜）長崎，安政 7 年（1860 年）文久 3 年（1863 年）兵庫（神戸）に外国人の居留を許し永久居住を認めた外国人居留地を建設した。

また同年 9 月になると通商条約を締結した諸国の軍艦が横浜港に姿を見せ始め，常時 20 隻前後が停泊しては交代で上陸し居留地民を警備していたと思われる。

また 10 月上旬には 24 隻の軍艦が停泊していたが，一番軍艦の数が多かったのは 16 隻を数えたイギリスであった。また 24 隻の軍艦の乗組員と

絵はがき 2　古城蔵　横浜海岸ボートクラブ　絵葉書

明治 40 年（1907 年）～大正 6 年（1917 年）
中央にボート競技用の舵付きペア艇

駐屯していた部隊の合計人数は約 8,000 名にも上る。そして当時外国人居留地にいた外国人の内訳では，総数 209 人中の 91 人をイギリス人が占めておりその比率は約 44%にも上る。

このことは明治新政府に対して影響力を強化したいというイギリス側の思惑があったものと思われるが，このことが後に開国したばかりの日本がイギリス的なスポーツ観の影響を強く受けていったことになるのではないかと思われる。

すなわちスポーツを行うものはルールを順守し，さらに紳士的でなければならないとか，スポーツを通して強い肉体を育成することが良い兵士の育成につながるという，当時の大英帝国として世界に名をはせていた大国イギリスで生まれたアスレティシズム思想[23]の影響を強く日本が受けていくことになると思われる。

また居留地に居住していた外国人たちは，このように多くの軍隊を駐屯させていたが，次第に居留地の拡張と整備を幕府に要求するようになっていった。さらに居留地内の行政権を握ると，居留地内で本国の生活様式そのままの日常を過ごしていったと思われる。

したがって軍人や市民の健康状態を改善するという名目で，スポーツ施設などの建設を幕府に要求するようになっていくが，そのことが逸早くイギリスで誕生したスポーツの多くが行われるようになった一因と思われる。

横浜のボートは文久 3 年（1863 年）頃から港に停泊中のイギリス艦隊の乗組員によって行われていたレガッタに，居留地の外国人が参加するようになっていったのは慶応元年（1865 年）頃であるといわれているが，どのような種目に参加したのかという詳細な記録はない。

また慶応 2 年（1866 年）イギリス人が中心となり，通商フランス波止場（現在の中区山下町 12 番地）にボートハウスを建設しバージー・クラブというクラブが創設された。

そして明治 4 年（1871 年）に行われた神戸・横浜インターポート・レガッタ競技会を期して横浜レガッタ競技クラブとニッポンレガッタ競技クラブの二つが統合して出来たのが横浜・アマチュア・ローイング・クラブ（YARC）であろうと思われる。

またバージー・クラブは年間 12 ドルの会費で競技用ボートやヨットを提供した他には，2 階のホールなども提供したと思われることから，外国

人の社交場的な役割も果たしたものと思われる[24]。

また明治4年（1871年）に行われた神戸・横浜インターポート・レガッタ競技会について，幕末に来日し週刊英語新聞（ジャパン・ヘラルド）を発行し活躍したイギリス人ジャーナリストのジョン・レディ・ブラック（John Reddie Black）はボートレースに対して次のように述べている。

「それは神戸の運動競技・競漕クラブの会員が，陸上と水上における親善試合をするために横浜に来たことだ。ボートレースでは神戸軍は，4本オールレースで負けたが，2双スカール対2双オールレースでは神戸軍はスカールのほうを取って勝った」[25]。

つまり前述のように，この試合ではKRACがボート種目の舵付きフォア[7]もしくは舵なしフォア種目では負けたが，2種目のうちどちらかを取って競うダブルスカル対舵なしペア[26]のレースでは神戸軍がスカール種目を選択して勝利を収めたと述べていると思われるがボート競技種目の断定は出来なかった。

しかし（居留地の窓から）の中に，神戸レガッタ・アンド・アスレティック・クラブ百年史ハロルド・S・ウイリアム著（Harod S. Williams）[27]が翻訳された記事を見出すことが出来た。

それによれば，

「ボートハウスは，4本オールのボート8台を充分格納できる広さだった。さらに，小さいボートも何台か置くことができた」[28]。

また明治4年（1871年）に行われた第1回インターポート・レガッタにおいて，

「神戸は4人漕ぎでは負けたが，ダブル・スカルと2人漕ぎ対等レースでは神戸が楽勝した」[29]

と書かれており，その艇種については注の中で，

「ダブル・スカル：一人が左右に1本ずつオールを漕ぐタイプ。これの2人漕ぎ。2人漕ぎ：ペアー・オールと言い，2人がそれぞれ両手で1本のオールを漕ぐ」[30]

と書かれていることから，競技用ボートのダブル・スカル種目とペア種目と考えられるが，ペア種目には舵付きペア種目と舵なしペア種目があるため，ペア種目の特定には至らなかった。

しかしこの記事により，明治4年（1871年）横浜で行われた第1回インターポート・レガッタで，ボート競技の種目が漕がれていたことが判明したと考えられる。

また神戸で漕がれていた種目を述べた個所であげられている，フォーという種目についての注によれば，

「フォアー：4人が，それぞれ両手に1本のオールを持って漕ぐ」[31]

と書かれており，この種目もボート競技の種目だと思われるが，フォアー種目にも舵付きフォアーと舵なしフォアーがあることからボート競技の種目の特定はできなかったが，ボート競技の種目が漕がれていたことが判明したと考えられる。

したがって横浜で競技用ボートを使用したボートレースの記録は，明治4年（1871年）であると考えられるが，レガッタという言葉の本来の意味はイタリア語の（論争）であると言われており，海外では広くヨットなどの大会にもこの言葉が用いられている。

そして競技としてのボートレースのことを指してレガッタと呼ぶことの多い日本では，レガッタに参加したということから，競技用ボートレースに参加したと解釈されることが多いが，実はそれだけでは海軍の使用するカッター艇でのボートレースなのか，競技用ボートでのボートレースなのかは判別できないのではないかと思われる。

つまりレガッタという言葉に対する解釈の違いや，ボートという言葉が持つ競技用と娯楽及び運搬用という意味の違いから，広い意味での明治2年のボートレース説が生まれたのではないだろうか。

4. 長崎におけるレガッタの起源

長崎でのボートについては，先述のイギリス人ジャーナリストのジョン・レディ・ブラックは慶応元年（1865 年）すでにボートやヨットのレースが居留地外人の娯楽とされていたと述べている。

そして横浜以外の居留地として，長崎で文久元年（1861 年）9 月 26 日火曜日に長崎レガッタが行われたことを伝えている。

J・C・ブラックによれば，その大会の役員は，

F・W・ハロウス（Hallowes）
R・N・チェアーマン（Chairman）
W・M・ロビネット（Robinet）
H・チャーチ（Howard Church）
F・A・グルーム（Francis Groom）

で，大会の内容は以下のようなものであったという。

レース

1. 大浦レース　ヨーロッパ人 4 人漕ぎボート。距離 1.5 マイル
参加費 5 ドル，賞金 25 ドル，優勝と第 2 位のボートに懸賞
2. 九州レース　日本船によるハンディーレース。距離 1.5 マイル
優勝 15 ドル，第 2 位 5 ドル，第 3 位 2 ドル
3. 長崎カップ　男子による 4 人漕ぎボート。距離 1 マイル
参加費 5 ドル，優勝カップ
総合優勝に 75 メキシコドル
4. 自家製の屋形船レース（ハンディーレース）
距離 1 マイル，参加費飛び入り 5 ドル，応募者 2 ドル
優勝 20 ドル，第 2 位 10 ドル
5. 長崎カップ　シングルペア　距離 1 マイル，参加費 3 ドル
優勝 30 ドルとカップ
6. 人々レース　日本支那製以外によるハンディーレース
距離 1.5 マイル，参加費 5 ドル，優勝 25 ドル
第 2 位 10 ドル，第 3 位 5 ドル
7. 帆船レース　各種の帆船による 3 隻ごとのレース
距離は役員が 2 マイル以下で決める。参加費 5 ドル
優勝 30 ドルとカップ
8. イナカレース　日本人の 4 人組によるハンディーレース
距離 1 マイル，参加費飛び入り 5 ドル
応募者 2 ドル，優勝 20 ドル，第 2 位 10 ドル

（原文のまま。居留地外人による『横浜スポーツ草創史』）

またこの長崎レガッタでの詳しい成績は残っていないが，元治元年（1864 年）に行われた 4〜6 人までの漕手による長崎カップの時は，ホルム・リンガー商会（Holme Ringer & Co）を創設した F. ホルムらが優勝し，長崎カップの快走舟のレースでは T. B. グラバー（T. B. Glover）[32] と弟の A. J. グラバー（A. J. Glover）の兄弟が優勝した。

また（居留地の窓から）の種目説明とこの長崎レガッタを比較した場合，横浜での 4 本オールレースは⑴の大浦レースと⑶長崎カップの 4 人漕ぎボートと同じような表現に思えるが種目の特定はできなかった。

さらに横浜での 2 双スカール対 2 双オールレースは⑸の長崎カップのシングルペアというどちらかの種目のようにも考えられるが，ペアという表現はボート種目では 1 人 1 本のオールを操る種目の表現に見られ，1 人 2 本のオールを操るスカル種目の表現には見られないことから，舵なしペアあるいは舵付きペアの可能性も十分に考えられるが，この言葉だけでは表現の違いがあるため詳しく判断することは困難であり，グラバー兄弟が優

勝した快走舟のレースという表現からもグラバー兄弟が出場したのがボート競技だとしても種目の特定は困難であった。

その後，先述の横浜で行われたYARC対KRACのインターポートレガッタに，明治18年（1885年）長崎のクラブと上海ローイングクラブが加わり，4港持ち回りのインターポートレガッタが開催されるようになるが，長崎と上海の団体の詳細は明らかにされていない。

しかし長崎で行われた長崎レガッタというレースが，ボートレースの種目として特定できなかったとしても，広義のレガッタという言葉から考えた場合には，記録に残るレガッタの起源としては明治2年（1869年）4月に行われた英国ビクトリア女王の誕生日を祝う記念ボートレースよりも，文久元年（1861年）9月26日火曜日に行われた長崎レガッタがより早い時期に行われたと考えられる。

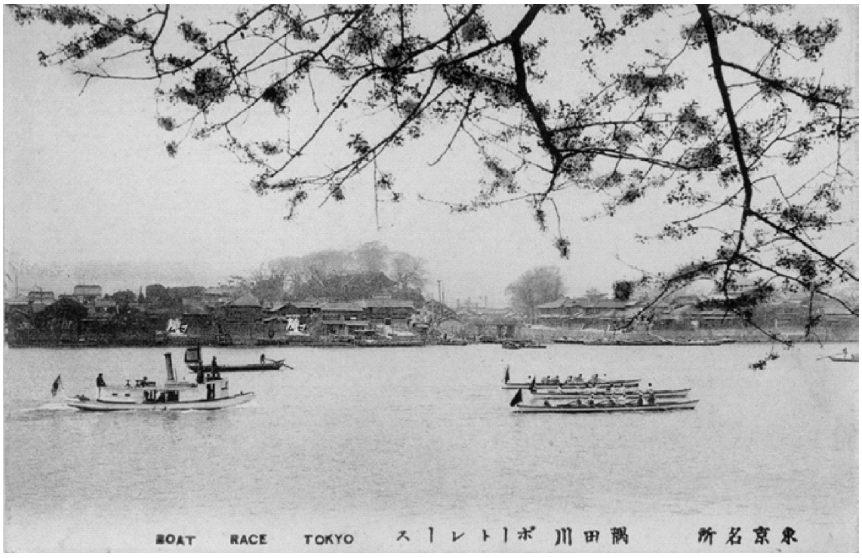
そこで長崎でのボート競技について調べたところ，昭和44年（1969年）に開催された長崎国体に向けて，昭和39年（1964年）に長崎県漕艇協会が設立されていた。

しかし第二次世界大戦の被害により，それまでのボート活動を含めた多くの資料は紛失してしまったものと考えられるが，昭和49年（1974年）に長崎海軍伝習所の日々（水田信利訳）[32]という本が発行され，安政3年（1856年）オランダ政府の勅命を受けて日本の将軍のためにキンデルダイク造船所で作られた蒸気船ヤパン（後の咸臨丸）を日本に回航した海軍中尉で軍医のビィレム・ヨハン・コルネリス・ホイセン・ファン・カッテンディーケ（Willem Johan Cornrlis・ridder Huijssen van Kattendijke）[33]の日記を翻訳したものであった。

それによると，安政2年（1855年）オランダ国王ヴィルレム三世が1隻の蒸気船を献上し，出島に居留し航海学およびその他の教育を担当していたのが第1次海軍教育班であった。カッテンディーケはその第1次海軍教育班と交代し，引き続き同様の教育を日本人に対して行う任務で日本に向かった。

それは，幕府が安政2年（1855年）長崎に海軍士官養成のために設立した長崎海軍伝習所に学ぶ，幕臣や大藩藩士などを教育するという目的であった。

そして，この第2次海軍教育班の行った教育課



絵はがき3　古城蔵　隅田川におけるボートレース　絵葉書

明治40年（1907年）～大正6年（1917年）
審判艇は蒸気船　6人漕ぎ＋コックス7人乗り固定席艇3艇によるレース

程の中に漕手の受け持ちとして水兵の仕事練習と書かれていることから，日本人もボートを漕いだ可能性が認められた[34]。

そしてカッテンディーケによれば，第1期から引き続き学んでいた勝麟太郎（海舟）は，新造されたカッターを暗礁に乗り上げてしまい修理の必要を生じたと述べていることから，多くの日本人たちが練習の一環としてカッターを漕ぐ技術や操船術を習得した可能性も認められた。

このようにして，長崎海軍伝習所で学んだ多くの日本人たちは自分たちが学んだ事と，長崎での見聞を広めていったとも思われるが，その中には当時の長崎港内に停泊した多くの外国艦船がカッターを使用して，陸上との連絡を図っていたと思われることから，先日のような口伝が生まれていったと思われるのである。

6. 新たな資料の発見

これまでの研究で，文久元年（1861年）9月26日火曜日に行われた長崎レガッタが，慶応2年（1867年）に横浜山下町十二の海岸通りでバアージクラブがスライディング・シートのボートなどを横浜居留地の外人たちが漕いだといわれていた事実よりもボート競技の起源としてはふさわしいと，考えられるが，前述のようにボート競技の種目が特定できなかったため推測の域を出なかった。

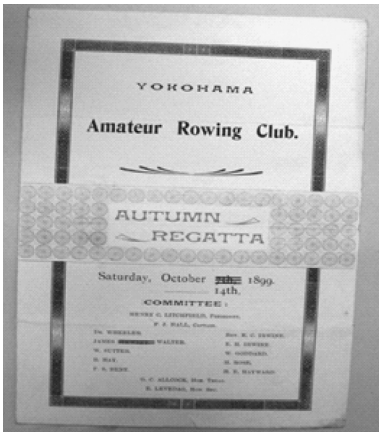
しかしこのたび発見したヨコハマ・アマチュア・ローイング・クラブ　1899年　明治32年第14回AUTUMN REGATTA　大会番組とヨコハマ・アマチュア・ローイング・クラブ　1900年　明治33年第26回SPRING REGATTA　大会番組を詳細に検討した結果，ダブル・スカルの種目は，Double Sculls種目でBow（先頭のポジション）Stroke（整調）のポジションが確認できたためボート競技のダブル・スカル種目と確認できた。

さらにPairsという種目では，Bow（先頭のポジション），Stroke（整調），Cox（号令掛）のポジションが確認できたので，ボート競技の舵つきペア種目と確認が出来た。

またFoursという種目では，Bow（先頭のポジション），2（2番目のポジション），3（3番目のポジション），Stroke（整調），Cox（号令係舵手）の記載が認められたため，ボート競技の舵つき4の種目と確認できた。

また第26回（1900年）スプリング・レガッタには神戸レガッタ＆アスレチック・クラブと，横浜アマチュア・ローイング・クラブとの対抗戦も認められたことでこれらボート競技で使われていた用語の普遍性も確認できたと思われる。

したがって，この2つの大会番組（プログラム）の発見により，日本におけるボート競技の起源と



ヨコハマ・アマチュア・ローイング・クラブ
1899年　明治32年
第14回AUTUMN REGATTA　大会番組　古城蔵

ヨコハマ・アマチュア・ローイング・クラブ
1900年　明治33年
第26回SPRING REGATTA　大会番組　古城蔵

しては，文久元年（1861 年）9 月 26 日火曜日に行，われた長崎レガッタがふさわしいと考えられる。

7. ま と め

以上のような既存記録の検証と新しい資料の発見により，横浜外国人居留地におけるボートレースの起源と長崎におけるレガッタの起源について検討を行ってきた結果，いままで記録として残されていたものの中で，ボートレースの起源の年代については，修正が必要ではないかと考えられた。

すなわち，ボートレースの起源は，明治 2 年（1869 年）5 月 24 日横浜でイギリス水兵により行われた英国ビクトリア女王の誕生日を祝う記念レースよりも，文久元年（1861 年）9 月 26 日火曜日に行われた長崎レガッタが相応しいと考えられるのである。

また初めてカッターを日本人が漕いだ時期については，カッティンデーケの日記に見られるように，安政 2 年（1855 年）長崎の長崎海軍伝習所において，オランダ人により行われたカッター訓練が相応しいと考えられる。

しかし上海ローイングクラブなどのその他の居留地におけるボート競技の活動内容及び他のレガッタの詳細については今後の研究を待たなくてはならない。

《注》

（1） 現在のボート団体名称は端艇部，漕艇部，ボート部が混在しているためここではボート部に統一した。

（2） バアージ・バージー・バージは河川交通や荷物の運搬に使われた艀や小型の舟

（3） 財団法人大日本体育協会編発行　大日本体育協会史下巻［日本漕艇協会史］，1937 年，p. 1385.

（4） 漕手（ボート選手）が座る席が動かず上半身のみで漕ぐ固定席艇（フィックス艇）に対して，漕手が座るシートが前後に動く形式（スライディングシート）

（5） 久保勘三郎・宮田勝善『ボート五十年』（時事通信社，1957 年）p. 9.

（6） 日本体育協会編発行『スポーツ八十年史』，1959 年，p. 247.

（7） 日本体育協会編発行『スポーツ八十年史』，1959 年，p. 845.

（8） 日本体育協会編発行『日本体育協会五十年史』，1963 年，p. 807.

（9） 宮田勝善『ボート百年』（時事通信社，1966 年）p. 93.

（10） バッテラとはポルトガル語で小舟のこと。長崎で停泊するポルトガル船と陸上との連絡用に使用された。この小さいボートの呼び方は，形が似ていたことからバッテラ鮨に名前を残していると思われ，北前船の航路である青森では小舟のことをバッテラと呼ぶ地域もあるという。明治初めのころ捕鯨船の古い艀を見た市民や，譲り受けて漕ぎだした学生たちの間でこのバッテラという呼称を転用したのではないかと思われる。

また本格的な競技用ボートの無い時代においては，海軍のカッターやバッテラなどの呼称が混在して用いられたと思われる。

（11） 今村嘉雄『日本体育史』（不昧堂，1970 年）p. 331.

（12） 遊津孟『日本スポーツ創世記』（社団法人・全国大学体育連合図書 1）p. 37.

（13） 剣牛レースとは別名ザ・ボートレースとも呼ばれる最古の大学対抗ボートレース。1829 年に初めてイギリスのオックスフォード大学とケンブリッジ大学の間で行われた。会場はテームズ川。

（14） 社団法人日本漕艇協会発行『漕艇 75 年』1995 年，p. 12.

（15） 久保勘三郎・宮田勝善『ボート五十年』（時事通信社，1957 年）p. 13.

（16） カッターを細くした小型のボートのこと。

（17） カッターとは大型船舶搭載の陸上等との連絡用に使われるボートで，帆を備えているものは帆走もできた。

（18） 岸野雄三編著者代表『新版　近代体育スポーツ年表』，（大修館書店，1996 年）p. 30.

（19） 棚田真輔『神戸スポーツ草創史』（道和書院，1976 年），p. 15.

（20） 棚田真輔『神戸スポーツ草創史』（道和書院，1976 年），p. 27.

（21） 棚田真輔『神戸スポーツ草創史』（道和書院，1976 年），p. 28.

（22） レガッタ（Regatta）という言葉はイタリア語で（論争）を指しベネチアのゴンドラを漕ぐ船頭たちの競漕会にレガッタを転用したものだと考えられている。したがってレガッタという言葉は日本では，ボートレースを指す場合が多いが，海外ではゴンドラ競漕やカヌー及びヨットなどの競漕も広く呼ばれている。

（23） アスレティシズム思想とは，19 世紀中ごろイギリスで生まれた。運動競技を推奨しクリケットやフットボール，ボートなどの集団スポーツ体験を通して人格陶冶を図ろうという教育手段。

(24)　山本邦夫・棚田真輔『横浜スポーツ草創史』（道和書院，1977年）pp. 105, 107, 112.

(25)　舵付き4は4人が一人一本のオールを使用する艇で号令係のコックスというポジションがあり5人乗り組みの艇をいい，同様に4人一人一本のオールを使用するが，コックスが乗り込んでいない艇を舵なし4と区別している。

(26)　ダブルスカルは一人で片手1本ずつ両手で2本のオールを操り2名乗り込む種目，舵なしペアは一人で一本のオールを操るものが2名乗り込む種目。

(27)　高木應光監訳，長谷川芙美子翻訳『ハロルド・S・ウイリアム著　神戸レガッタ・アンド・アスレチック・クラブ百年史』神戸外国人居留地研究会年報『居留地の窓から』，（神戸外国人居留地研究会第4号，2004年）。

(28)　高木應光監訳，長谷川芙美子翻訳『ハロルド・S・ウイリアム著　神戸レガッタ・アンド・アスレチック・クラブ百年史』神戸外国人居留地研究会年報『居留地の窓から』（神戸外国人居留地研究会第4号，2004年），p. 145.

(29)　高木應光監訳，長谷川芙美子翻訳『ハロルド・S・ウイリアム著　神戸レガッタ・アンド・アスレチック・クラブ百年史』神戸外国人居留地研究会年報『居留地の窓から』（神戸外国人居留地研究会第4号，2004年），p. 146.

(30)　高木應光監訳，長谷川芙美子翻訳『ハロルド・S・ウイリアム著　神戸レガッタ・アンド・アスレチック・クラブ百年史』神戸外国人居留地研究会年報『居留地の窓から』（神戸外国人居留地研究会第4号，2004年）p. 146.

(31)　T・B・グラバー（Thomas Blake Glover）はスコットランド生まれの商人。大浦海岸近くで慶応元年（1865年）始めて蒸気機関車を走らせた。グラバー紹介の破産後，三菱財閥の相談役を務めた。後年東京市芝区に居住し鹿鳴館の運営に寄与した。

(32)　ヴィレム・ヨハン・コルネリス・ホイセン・ファン・カッテンディーケ（Willem Johan Cornelis ridder Huijssen van Kattendijke）オランダの海軍軍人，蒸気船ヤパン号船長。

(33)　永田信利訳『長崎海軍伝習所の日々』（平凡社，1974年）。

(34)　永田信利訳『長崎海軍伝習所の日々』（平凡社，1974年），p. 27.

参考文献

加藤橘夫訳『体育の世界史』（ベースボール・マガジン社，1976年）

加藤橘夫・田中鎮雄訳『近代イギリス体育史』（ベースボール・マガジン社，1973年）

松村高夫・山内文明訳『英国スポーツの文化』（同文館出版社株式会社，1995年）

今村嘉雄・石井トミ『ライス・世界体育史』（不昧堂書店，1968年）

今村嘉雄『西洋体育史』（日本体育社，1953年）

浅見俊雄・宮下充正・渡辺融編『現代体育・スポーツ体系』（株式会社講談社，1984年）

古城庸夫『コーチ学入門』（江戸川大学スポーツビジネス研究所，2005年）

古城庸夫『ボート競技の歴史年表』（江戸川大学スポーツビジネス研究所，2000年）

古城庸夫『日本におけるボート競技の起源についての考察』（『江戸川大学紀要』第19号，2009年）

川崎晴朗『築地外国人居留地』（雄松堂出版，2002年）

木村毅『日本スポーツ文化史』（ベースボール・マガジン社，1981年）

菱谷武平『長崎外国人居留地の研究』（九州大学出版会，1988年）

久保勘三郎『東京帝国大学漕艇部五十年史』（東京帝国大学漕艇部，1936年）

宮田勝善『改定新版　ボート百年』（時事通信社，1976年）

半藤一利編『東京大学漕艇部百年史』（東京大学淡青会，1992年）

四神会『一橋ボート百年の歩み』（四神会，1983年）

稲門艇友会『漕艇部の百年　早稲田ボート文化史』（100年史編纂委員会，2002年）

東京外語艇友会『外語ボート100年』（東京外語艇友会，2001年）

三田漕艇倶楽部『百年のあゆみ』（慶応義塾体育会端艇部，1980年）

東北大学漕艇部百周年史部会『東北大学漕艇部百年史』（東北大学漕艇部百周年記念事業会，2003年）

京都大学体育会端艇部『京都大学端艇部百年史』（京都大学体育会端艇部，2000年）

日本大学ボート部『力漕百年』（日本大学体育会ボート部，2005年）

東京経済大学葵水会『100年史』（東京経済大学葵水会，2004年）

蔵前漕艇倶楽部『東京工業大学端艇部100年史』（蔵前漕艇倶楽部，2001年）

明治大学大学端艇部編『明治大学体育会端艇部百年史』（明治大学端艇部実行委員会，2004年）

同志社艇友会『同志社ローイング100年』（同志社艇友会，1991年）